

帰国後の心情：「自」

帰国してから数日が経ち、ようやくゆっくりと1年間を振り返り始めました。たくさんの出来事や変化にあふれていた日々をこの短いページにまとめることはとても出来ないため、漢字一字に1年間の思いを込めてみることにします。その漢字は「自」。なぜならこの1年間は、今までで一番、自分のために時間を使ってきたと思うからです。自分のやりたいことを勉強し挑戦できましたし、又うまくいかないことが続いて悩んだり将来について考えたりする時も、とことん自分と向き合う時間がもてました。新しいことや人に出会う機会も多かった分、自分という人間をきちんと理解して発信できるように努めるようになりました。そしてもう一つの理由、それは自分の中での一番の変化についてです。この1年間の留学から影響を受けたことを挙げるとするならば、それはいつでも「等身大の自分」でいられるようになったことです。自分の意思を常に持つこととそれを相手にも伝えることの大切さを、留学が始まってから3カ月ほど経った頃にアメリカ人の女友達から教えられました。私は少し優柔不断なところがあったのですが、自分はどうしたいのかを軸として考えるようになってからは、自分のとるべき行動が自然と見えてくるようになりました。

以前の私は、周りからうける評価を少し気にしすぎていたかもしれません。知らず知らずのうちに本当の自分よりも背伸びして、少しでもよく見てもらおうと自分で自分にプレッシャーを与えてしまっていました。この情報誌の原稿を担当してみないか、と早稲田での授業の講師であった松本先生に声をかけていただいた時も、「人に読んでもらうのだから、何かいいこと、ためになるようなことを書かなくては。」と気を張っていました。もちろん目標を高く持つのはいいことで、それに向かって自分の力以上に努力することで人は成長できます。何かに挑戦するときに適度な緊張感があることも大切。でも、人に何かを伝えたいときには変に飾りすぎた言葉よりも、素直に口に出した言葉のほうが何倍も心に響くのではないのでしょうか。それに気がついたことで、のびのびと自然な言葉が出てくるようになりました。たとえ自信がなくても、そんな自分に卑下することなく自分らしさで勝負する。この1年で学んだ大切なことの一つです。

早稲田の学生の留学エッセイは、下のサイトでお読みになれます。

www.infoe.com/IMZ/WASEDA/WSD-List-1.htm



帰国前日、ポートランドにて友人達と最後の夕食。
(私の両親（写真右）も日本から私を訪ねに来ていました!)

INFOEを通して

この情報誌「INFOE」に1年間携わることができたことも、私にとってとても貴重な経験となりました。隔月の原稿に向かうことは、自分のたどってきた2ヶ月間をフィードバックすることでもありました。留学前までの私は、決めたら後ろを振り返らずに、とにかく全力で進んでいく、というスタイル。それはそれで潔いけれど、こうしてときどき立ち止まって自分のたどった道を少し振り返ってみる。すると、大事な出来事をもっと鮮明に心にとどめておくことができ、その先の自分への反省として活かすことができます。いつも「あっという間に時間が過ぎたな」と感じていましたが、1年間を一気に振り返って反省するとなると大仕事です。1年分の原稿を読み返すことで、その時その時の気持ちまでもよみがえってきます。ここで、ただ思い出にひたるのではなく、こうして積み重なってきたフィードバックを、私の留学そして異文化経験として活かしていこうと思います。

この1年間、INFOEという媒体を通してこの留学生活をつづってきましたが、本当に私は数多くいる留學生のうちの1人で、この留学記も私の生活で感じたことのほんの1片かも知れません。それでも、こうして私の視線からの異文化での日常を留学記として1年間お送りし続けることができたことを、本当に感謝しております。毎号つたない文章ではありましたが、最後まで連載を任せてくださった松本先生、そして私の留学生活体験記に目を通してくださった皆様、1年間どうもありがとうございました。



三浦さん、1年間の留学を終え、日本に帰りました。

これまでの体験記を読み直すと、1年間の彼女の成長がよく解ります。帰国した彼女と、ゆっくり話をするのが楽しみです。

2004年の創刊号から続いてきたこの留学エッセイの筆者は、三浦さんで8人目でした。それぞれの学生が留学から多くのものを学び、成長していく姿を見て、海外の子ども達の成長の姿と重なります。

三浦さん、1年間の寄稿、ありがとうございました。